会報

〒114-8580
東京都西ヶ原4-51-21
東京外国語大学内
東京外語ロシア会
電話 03-3917-6111(代)
振替口座 00110-8-22338

ロシア会再興によせて

会長　原　卓也

原　卓也会長

ロシア会創立

来年、すなわち一九九九年、母校は創立百周年を迎える。ロシア会会員の諸兄姉にも記念事業へのご寄付など多大のお力添えをいただき、心から感謝している。

ロシア会の歴史はこれよりやや浅く、大正十五年（一九二六年）七月刊行の「会報」第三号（第三号となってはいるが、「会報」の体裁をなしているのはこれが第一号といってよいらしい）で、ロシア語研究の大先達であり、東京外語のロシア語の父ともいうべき八杉貞利先生が、創旨を述べておられる。

それによると、ロシア語草創期の主任教授、鈴木於菟平先生の追悼パーティを一九二四年に行なった席で、ロシア語科に校の内外を打って一団とする組織のないことがまことに遺憾であるという声が強く、創立の運びとなったようだ。それまでも露西亜会なるものは存在したけれど、有名無実であったらしい。従来ロシア語専攻は東京外語だけであったのが、その少し前に大阪外語、ハルビン学院が創設されていることからみても、新生ソ連への関心とロシア語の需要が急速に高まっていたのであろう。この時の会則によると、会員は現旧教員、本科・選科卒業者及び修了者ならびに在学生から組織する、となっている。そして、その時の本科出身者が約五百名、在学生が七十二名であったという。

再興まで

しかし、その後いつの頃からか、ロシア会といえば卒業生だけの集まり、つまり、ロシア語科同窓会になってゆき、総会の開催や会報の発行も定期的にゆかなくなってきた。通信や事務、会計などのほとんどすべてを、教官が学生たちの助けを借りて行なってきた体制で、学生数の増加につれて教官の忙しさも増し、特に近年は大学院の整備や博士課程の新設、語学科から課程制への移行と三大講座制（言語情報、総合文化、地域・国際）の創設など、大学全体の組織構造の抜本的変革もあって、まことに申しわけない話ながら、正直のところ教官にとって、ロシア会までとても手がまわらなかったのである。

しかし、伝統あるロシア会の火をこのまま消してしまってはならぬという声は根強く存しており、古茶兵衛、井上勝、今西昌幸、町田裕子、中澤孝之氏その他きわめて熱心な各位のご努力がついに実を結んで、昨一九九七年十一月、十数年にわたる空白期間ののちに再興第一回総会を開くことができたのであった。しかも、当夜の懇親会は東郷正延先生の卒寿をお祝いする会とさせて頂き、さらに先生のたってのご希望もあって、飯田規和氏の県立新潟女子短期大学の学長就任、千野栄一氏の和光大学学長就任をも併せてお祝いすることになったため、六階大会議室に入りきらぬほど大勢の会員が参集して下さった。

当日の総会でロシア会は、創立時の初心にもどって、あらためて在学生も正会員にすることになった。となると、現在の会員数が約二千三百名、これに院生・学部生が三百近く加わるから、非常に大きな組織になるし、過去のように教官と学生だけで四苦八苦するわけではないから、大きな発展を期待することができるだろう。

最近のロシア情勢と会員の活動

今年、一九九八年八月二十三日、エリツィン大統領は突然キリエンコ首相ら全閣僚を解任した。その少し前の八月十七日には、またしても通貨ルーブルの切下げが行なわれている。一九九一年のソ連解体以来のロシアの混迷はどこまでつづくのか、どういう形になってゆくのか、現在の時点ではさっぱり見当もつかない。こうした情勢を反映して、ロシア語学習熱もペレストロイカ当初に比して格段に落ち、他大学の第二外国語などでは履修者が激減しているようだ。しかし、まさにそのような時だからこそ、ロシア研究はいっそう本格的に取り組まねばならない。ロシア会創設時の「外国語を知らずに外国の事情を論ずるのは木にのぼって魚を求めるのにもひとしい」という趣旨の八杉先生の言葉は、今や常識となっている。幸い、わが国におけるロシア語教育、ロシア文化研究をリードしている人の多くは、本学出身者である。マスコミ、商業、貿易など各分野の第一線で活躍している人も多い。新聞、テレビのロシア特派員の大多数は、ロシア会の会員である。また、わたしたちの若い頃には想像もできなかったことだが、毎年ロシアに留学する学生も少なくないという。ただ、近年の学生は縦の関係が稀薄で、同学年の者としか付き合わぬ傾向があるともきく。であれば、若い卒業生、学生諸君がロシア会に結集して生新の気を吹きこみ、あわせて先輩たちがどのような業績を残しているかを知ることは大きな意味を持つだろう。そしてわがロシア会が、単に同窓生親睦だけの場ではなく、ロシアに関する情報交換の有力な拠点ともなってゆくことを期待したい。（昭28卒・前東京外国語大学長）

一九〇〇（明治三十三）年から一九九八（平成十）年までのロシア語学科卒業生数

現存者	三、四一〇名
ロシア語学科	二、四〇七名
ロシア語学科（～平成八年）	二、二七二名
ロシア東欧課程ロシア語専攻（平成九、十年）	一三五名
消息不明者	一七〇名
ロシア語学科	一六七名
ロシア東欧課程ロシア語専攻	三名
物故者	八三三名

（東京外語会名簿委員会の本年十月一日現在のデータによる）

再生ロシヤ会総会（平成九年十一月二十二日）について

東京外語ロシヤ会の経緯

東京外語ロシヤ会は、一九二四年（関東大震災の翌年）に時の主任教官の八杉貞利先生の主唱によりロシヤ語科関係者の親睦とソ連邦に関する知識を深めるために設立されたもので、このような古い歴史をもった語部別組織は他に類を見ないものです。昔は駐日ソ連大使が着任すると講演会を開いたり、ソ連をつぶさに視察して帰ってきた人がいると、会員であると否とを問わず帰朝報告会を開いたとのことです。

初代会長は八杉先生、二代会長は当時の主任教授佐藤勇先生で会の運営を積極的に指導されて来られました。勿論事務局の方々の地道な活動が大きな支えであったことは言うまでもありません。

しかしながら一九六九～七十年の学園紛争の影響もあって総会が開かれない時代や隔年開催がしばらく続いた後に、一九八一年十二月十一日の総会を最後にロシヤ会は休眠状態に入りました。これは一に佐藤前会長がご逝去されたことによる影響をうけたものと思われます。

最近の状況

さて一方においては、東京外語創立百周年の記念事業のための募金活動が開始されると、フランス語、ドイツ語、スペイン語、インドネシア語等の語部別同窓会は迅速に協力体制を整えました。これに呼応して英語、イタリア語、モンゴル語でも語部別組織の発足に動きだしました。

こうなると我が方の諸先輩から「ロシヤ会はどうなっているのか」という声が高まってきました。ちょうどそういった時期に東郷正延先生の卒寿の会の話がもちあがりました。そこでこの機会にロシヤ会の総会も併せて開催するという運びになりました。

皆様のところにもご案内が届いたことと思いますが、ロシア語科卒業生全員にお声をかけて一九九七年十一月五日に再生ロシヤ会世話人会を開催いたしました。

世話人会においては、主として会則案と役員候補について話し合われました。会の性格としては、従来通り緩やかな結合体とすることが合意されました。

会の名称は諸先輩が発音を重視しロシヤ会とされたことを尊重することにしました。会員資格にかんする表現は最近の学制に合わせるとともに、在学生も会員に含めることとしました。

会費は従来一千円であったものを二千円とし、以前からペンディングであった終身会費制を今回から採用して金額を三万円とし年会費制と併用することにしました。当然の事ながら、学生会員は会費納入義務を免除されています。会の活動の中心は従来通り会報の発行ということになりましたが、名簿については外語同窓会の名簿がかなり整備されている事実に鑑み、必要に応じて発行することとなりました。

人事面では、次頁の通りの役員・顧問が推薦されました。原新会長は皆様ご存じの如く、本学の前学長です。古茶副会長は外語同窓会の副理事長で、磯谷副会長はロシア東欧課程代表教授です。なお今回から会計監査役が置かれることになりました。

十一月二十二日の総会においては、会費、人事案等は世話人会の提案通りとなりましたが、会の名称については活発な意見の交換がありました。すなわち、ある方々は、現在のマスコミではロシアが使われており、大学においても一九九五年からロシア語科と変更された事でもあるためロシア会としてはどうかという意見でした。一方においては伝統あるロシヤ会のままにすべしという意見もありましたが、議長裁定でロシア会となりました。

その他従来のロシヤ会では会計年度は不文律で四月から三月までとしておりましたが、これを四月一日から三月三十一日までと明記することが提案され採択されました。

その他

原新会長の挨拶の後に、古茶外語会副理事長から外語百周年記念事業の説明と募金にたいする協力要請があり、続いて野中東京外語同窓百年史編纂委員長（E昭34）から同窓生の百年史についての説明および町田幹事からロシア語科同窓ヒストリーへの協力依頼がありました。

また総会終了後に臨時幹事会が開かれ、幹事長に渡辺、庶務責任者に今西、会報責任者に町田、会計責任者に井上の各幹事が選出されました。

（文責　今西昌幸・昭34卒）

東京外語ロシア会会則

一九六二年十一月二五日総会決定
一九六七年七月八日総会で改正
一九七二年七月二日総会で改正
一九九七年十一月二二日総会で改正

第1条　本会は東京外語ロシア会と称する。
第2条　本会は会員相互の親睦を図るとともにロシアおよび旧ソ連邦に関する知識を増進することを目的とする。
第3条　本会は東京外国語学校露語部、東京外事専門学校ロシヤ科、東京外国語大学ロシヤ語学科および東京外国語大学ロシヤ・東欧語学科ロシヤ語専攻の旧教官、卒業生、および修了者ならびに東京外国語大学ロシア・東欧課程ロシア語専攻の現旧教官、卒業生および在学生をもって組織する。
ただし上記以外の者も幹事会の承認を経て入会することができる。
第4条　本会は会員より会費年額2千円または終身会費3万円を徴収する。ただし在学生は会費納入義務を免除される。
第5条　本会は通常年1回総会を開く。その他の会合は臨時にこれを開く。本会の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終了する。
第6条　会合の決議は出席者の過半数の賛成による。
第7条　本会に以下の役員を置く。
会長1名副会長若干名、幹事若干名、会計監査2名。
第8条　会長は総会これを選出し、本会を代表する。
第9条　副会長は総会これを選出し、会長を補佐する。
幹事は総会これを選出し、会務を分掌する。
会計監査は総会これを選出し、会計を監査する。
第10条　役員の任期は3年とし、重任を妨げない。
本会に顧問をおくことができる。顧問は総会の承認を経て会長がこれを委嘱する。顧問は会長の諮問に応ずる。
第11条　本会は年1回会報および必要に応じ会員名簿を発行する。
第12条　本会の事務局は東京外国語大学内に置く。
地方の事情により本会の支部を設けることができる。

卒寿のお祝いの会へのお礼にかえて

―露和辞典編纂事業のこと―

東郷正延

昨秋は私のために同窓の皆さまに祝賀会を催して頂き、誠に有難うございました。北は北海道、南は九州から駆付けて下さった方々も加え盛大な会となりましたが、それにつけても縁の下の力となってこの会の組織に当られた皆様方には改めて心からお礼を申し上げる次第です。

その節は広い会場でご列席の皆様を立たせたままでいささか長話をしてしまい大変恐縮しております。今ここに改めてあの折申し上げておきたかったことを書きとめさせて頂きました。

卒寿の会で　東郷先生

私は誠にいたらない研究者ではありますが、生涯をロシア語の普及運動に捧げることにしてこれまで何十年かやって参りました。ロシア語の辞書を作ることも普及運動の重要な一環であるとの信念から一九六二年から八八年までの26年間は専ら研究社露和辞典編纂の組織の一端を担って参りました。ただ最初の契約内容は既に刊行されて広く普及している八杉先生の岩波版ロシア語辞典を規準とすることとし、これより二、三百ページの超過は認めてもよいというものでした。私はどうもこのところが心に引っ掛かって中々仕事に手がつきませんでした。三百ページ程度増やして頂いたとしても既にその地位を確立している恩師の辞書の亜流を作るだけではないか、それでは時代に応えて自分の思い描く辞書とは程遠い。こう考えると悪いと思いながらどうしても仕事に精が出ず会社にも組織の皆さんにも大変な迷惑をかけることになりました。ところがやがて思わざる転機が訪れることになりました。出版社との間に辞書出版の話をまとめられた功績者である石山君が何としたことか停年も待たずに不帰の客となられたのです。一時はどうなることかと前途が真暗になりました。しかし始めた以上中途で放棄することは許されない。年功のせいで私が体制再建に当らせられることになったが、第一に解決を迫られたのはそれ迄一緒にやってきた石山君の抜けた穴をどう埋めるかということでした。そこで私の頭に浮かんだのが染谷茂君でした。早速話をしたところ同君も快く引受けて下さったので「ある晴れた日に」同君を研究社に紹介旁々お連れしました。当時辞書部長をしておられた河野さんと編集長の小沼利英君が出迎えて下さったが、この時河野さんが参考のためにと持参されたのが間もなく刊行予定の或る英和辞典の束（つか）見本でした。辞典の名前も編者名も伏せてあったが二千六百ページ分を白紙で綴り、これに然るべき装丁を施してあり、手に取ってみると、さすがにずっしりと重い。《そうだ、これだ！》―この時私の頭を、オネーギンの姿を一目見たときのタチアーナよろしく、この想いが電光のように走りました。

これなら、これまで涙を呑みながら次から次と捨ててきたアカデミー大辞典中の単語を残りなく採り入れることができると思うと永年の胸のつかえが消えてゆく思いであった。

《よし、わが方もこれで行こう！》と心に決めて早速この考えを小沼編集長を通じて社の方に伝えてもらい、どうなることやと待っているうちに、社の方からOKの返事がかえってきた時の喜びは今だに忘れることができません。それからというもの私はまるで別人のように仕事に精を出すようになり、そして、（私の怠惰な期間も含めて）スタート以来26年目の一九八八年に辞書は日の目を見ることができたのでした。それにしても組織の中で仕事を共にして下さった多数の方々のご協力なしには到底このような長丁場を乗り切ることが不可能なのは言うまでもありません。校正刷を先ず原稿と対比して脱落個所の有無を調べるというような地味な仕事などもして下さった院生の方々、これまた地味な印刷の仕事に熱意を傾けて下さった印刷所の方々のお名前などは普通は辞書には記載されないのが慣例のようですが、私はどのような領域ででも辞書のために働いて下さった方々のお名前は残らず記録にとどめ、謝意を表明することを実行させて頂きました。なお、編集長の小沼利英君については私が序文の中で名参謀長としてその功績を特記しておりますが、同窓の間柄であることもあって全力投球で助けて頂きました。彼が居てくれなかったら果たしてこの仕事が完成できたかどうか―と考えることがあります。辞書中に引用されているロシア語の例文もすべて教養あるロシア人たちに検討してもらう―こんなことを実行に移したのも彼のアイデアでした。話は変わりますが私の郷里につくばね詩人の愛称で親しまれている詩人横瀬夜雨（一八七八～一九三四）がいます。その地方きっての豪農の家に生まれたがクル病に生まれついたために地元の中学校にさえ行くことができず、もっぱら自宅で詩を書いて暮らしておりました。晩年のある日、文通によって親交を結んでいた北原白秋が友人と二人で、夜雨の郷里を訪ねることになりました。そこで夜雨は遠来の客を筑波山に案内することを思いつきました。彼は住込みで農業を手伝ってくれている屈強の若者たちに両側から抱きかかえるようにして白秋らと行を共にし、ついに筑波登山という年来の夢を果たすことができました。そして間もなくこの日の感謝を「筑波に登る」という短い詩に凝結させました。

筑波に登る（最終聯）

《嗚呼山は　筑波嶺／天低く　立てれども／命哉　ながらへて／吾終に　登りたる》

私は自分の辞書の仕事を振り返ってふとこの詩を思いだしました。そういえば私もまた染谷君と磯谷君に両脇を支えられながら、やっと山頂に辿りつくことができたのではなかったか？―そう思った途端偶然の符合に思わず唇から笑みがこぼれてきました…。

東京外語ロシア会役員・顧問名簿

会長　原　卓也(26・28)
副会長　古茶兵衛(25)、磯谷　孝(38)
幹事　井上　勝(25)、宮内邦子(31)、今西昌幸(34)
町田裕子(34)、中澤孝之(36)、月出皎司(38)
大浩義之(43)、渡辺雅司(44)、中村昌代(44)
田島信元(46)、中澤英彦(48)、坂本宜子(52)
山崎博子(53)、高村聖木(56)
増谷洲欧(院2年)、佐伯郁智(3年)、
橋田智宏(3年)、野口寛子(3年)、
田村　雄(2年)
会計監査　岡本　浩(21)、佐藤純一(29)
顧問　東郷正延(6)、和久利誓一(11)、米川哲夫(20)

ウラジオストクを訪ねて

中澤孝之

今年七月初め、ウラジオストクを短期訪問した。ロシア沿海地方の首都であり、夕日の美しい金角湾で知られた、坂の多い町である。ロシア極東では、ハバロフスクやコムソモリスカヤナアムーレに行ったことはあるが、ウラジオストクは初めてだった。

同地は明治初期から日本となじみの深い町である。例えば、明治二十九年（一八九六年）に二十四歳のときに初めてウラジオストクを訪れ日本人経営の会社で勤め、その後何回も同地を訪れたことのある、著名なジャーナリスト大庭柯公は名著『露国及び露人研究』の中で、在留邦人目当ての「女郎屋」が既に出現していたことを記している。しかし、ざっと町を回ったかぎりで、日本風の建物が若干残っているユジノサハリンスクと異なり、日本時代の名残は見当らなかった。

ウラジオストク駅

周知のように、ウラジオストクは一九三二年、柳条橋事件をきっかけに要塞都市となり、さらには極東海域をにらむソ連太平洋艦隊の基地だったため、第二次世界大戦後はゴーリキー市（現ニジニノブゴロド市）などと並ぶいわゆる「閉鎖都市」であった。同市は外国人に対して閉ざされていただけではない。国内他地域のソ連国民ですら無許可で立ち入ることはできなかった。ゴルバチョフ時代末期の一九八九年、自国民に、一九九〇年には、ついに外国人に開放された。これはまさにペレストロイカの残した数々の歴史的な功績のうちの一つと言ってよい。サハロフ博士夫妻やソルジェニーツィンなど反体制派の追放解除と同様、ペレストロイカがなければ、こうした開放は実現し得なかったであろうからである。

ロシアはどこでもそうだが、個人の旅行はひどく難儀である。第一、地方都市ではタクシーなるものがほとんどつかまらないから、白タクを雇うしかない。雲助タクシーもいて危険だという話を聞いた。外務省を通じて現地総領事館にアテンドを頼んでおかなかったら、恐らく身動きできなかったであろう。

金角湾に臨む

いくつか印象を記すと、まず第一は、走っている車のおよそ九八％は右ハンドルの日本車である。町中の車だけを見ていると、ふと日本にいるような錯覚さえおぼえる。聞きしに勝る日本車の洪水だ。事実、漢字やひらがなの看板をそのままにした車が走っている。宿泊したホテルの近くにルイノックがあった。その一角に日本製の小型冷蔵車が数台並んでいて、売り子が傷みやすい生鮮食料品をそこから取り出して新鮮なまま売っているのには驚いた。

第二は、恐るべきインフラの未整備。道路の悪さ、毎日必ずある停電、汚れた上水道など、想像はしていたが、そのひどさは予想をはるかに上回った。信じられない話だが、空港から都心に向かう幹線に中央分離ラインが引いてないのである。到着したのは日曜日の午後だった。上り線は郊外のダーチャから家路を急ぐ車のラッシュで、中には下り線に大きくはみ出して疾走するマイカーも。これで事故が起きない方が不思議なくらいだ。途中で、大きな事故を三件目撃した。

そして、放置されたままの悪路。この国の長い冬の厳しい自然現象が道路を傷めることは理解できるが、原因はそれだけではないのではないか。市内の一部には路面電車が走っているが、そのレール沿いは大きな穴ぼこだらけ。いくら車のスピードを緩めても、上下にひどく揺すぶられる。「腹に力を入れていないと、内臓がやられますね」と同乗者と顔を見合わせて思わず苦笑い。雨上りの道路事情は想像に難くない。ともあれ、こうした悪路に強い日本車の評判は上々のようである。また、停電には案の定、悩まされた。電力会社の労働者のストの影響と聞かされたが、慢性的な電力不足が主因だ。一日に何回となく停電する。朝方の停電で、ホテルでは満足な朝食が出ない。おまけに突然の断水で、ホテルで髭も剃れず、自家発電装置をもつ総領事館にお世話になる始末だった。次の日から前夜にバスタブに水を溜めておいた。しかし、とうに耐用年数の過ぎた鉄管の錆のせいで上水道は鉄分を含み、赤茶けて特別の匂いを発する。比較的よく整備されたモスクワなど大都市だけでロシアを判断してはならないことを改めて痛感した。

外装もそのままに使われている日本車

最後に、全ロシア的な現象だが、目につく商品のほとんどが、ルイノックで売られている食料品も含めて、輸入品である。家具店や電器店に立ち寄ってみたが、高級ホテルでしかお目にかかれないような豪華なイタリア製のバスタブ、北欧製の家具や日本製、イタリア製の大型電気洗濯機などが並べられていた。客はいなかった。競争力ある国産品が見当らないのは分かるが、それにしても一体だれがこんな高級品を買うのだろうかと不思議に思った。

性急なソ連解体で、日用民需品の生産体制がこの国ではほぼ完全に崩壊したまま、六年半たってもなお立ち直れない惨めな現状を物語っていた。エリツィン政権の明白な失政の結果でもある。高価ながら購買力をそそる圧倒的な数の外国製品が入ってこなければ、ロシアの店頭はソ連時代とほとんど変わりないのではないか。ロシア伝統のパカズーハ（見せかけ）という言葉が脳裏をよぎった。（昭36卒・県立新潟女子短大国際教養学科教授）

清水威久氏のご遺族からスイチン社刊行『トルストイ全集』のご寄贈

この度、清水氏の末妹にあたられる古閑雪氏から兄君の蔵書『トルストイ全集』を東京外国語大学に寄贈したい旨のお申し出が菅原恵美子さん（F42卒）を通してありました。

清水威久氏は一九二六（大正十五）年に母校露語部文科をご卒業、外務省留学生試験に合格してレニングラードに着任。その後モスクワ、ハバロフスクで勤務。一九三六年ハルビン学院教授。東亜研究所勤務を経て、一九四一年外務省に復帰。一九六〇～六三年ワルシャワの日本大使館に勤務。一九六九年に外務省をご退職。著作に「ロシア建国外史」、「ロマノフ朝最後の日」「ソ連邦と日露戦争」、「レーニンと下田条約」、「ソ連の対日戦争とヤルタ協定」、「北方領土問題解決の四方式」、「北方領土問題と日本共産党」などがあります。

一九八一年七月に逝去されましたが、歴史書などの専門書からなる清水氏の蔵書多数がご遺族から外務省に寄贈され「清水文庫」としておさめられているとのことです。

今回、母校図書館におさめられる『トルストイ全集』は革命前のロシアで最も成功をおさめたものといわれ、P・I・ビリュコーフが監修し、一九一二年からロシアの大出版社スイチン社が刊行したもので、トルストイの主著を非常に豪華な装丁、豊富な挿絵（著名な挿絵画家A・P・アプシトやロシア芸術家同盟創設者でのちに亡命したL・O・バステルナークなどの）や芸術座の舞台写真付きで収録しています。二十世紀初頭ロシアの世界的に優れた印刷技術を駆使して作られておりその点でも貴重だということです。

現図書館長の高橋作太郎教授は「大変有難いお申し出で大切に保管し、研究者の閲覧に供し役立てたい」と仰っています。

清水夫人のオリガさんはペテルブルグ生まれ、アカデミー舞踊学校を卒業、一九三六年来日以来、日本のバレエ草創期に、日劇バレエ・チームの教師として松山樹子氏ほか多くのバレリーナを育てた方です。オリガさんは一九二二年に訪日公演した世界的バレリーナ、アンナ・パーヴロワや二十年代には日本に亡命していて、後にやはりすぐれた日本のバレリーナを育てることになるエリアーナ、ナジェージダ・パーヴロワ姉妹と偶然同じパーヴロワ姓でしたが、オリガ・サファイアという芸名で活躍されました。

（文責　町田裕子）

清水威久、オリガ夫妻のレリーフ像
秋田在住の彫刻家、鎌田俊夫氏作（鎌田夫人はオリガさん最後のお弟子佐藤俊子さんの教え子）

会計から

2頁の会則の説明にありますように、ロシア会の会費は、年会費二千円、または、終身会費3万円となりました。会報の封筒に郵便局の払込み用紙を同封しましたので、宜しくお願い致します。なお、手数料は二千円で七十円、三万円で百二十円とのことです。

また、この会費納入は98年度分（本年度）からとなります。昨年11月以降納入された方は納入済みとなりますので、用紙は廃棄して下さい。

復活ロシア会の会計の現状は左記の通りです。年間に予想される会の事業としては、最低年一回の会報の発行と総会開催があり、他に講演会、在校生の語劇援助等考えられます。経費としては会報と総会だけでざっと七～八十万円（郵送費、雑費を含む）は必要で、その他の事業を計画すれば百数十万円以上となります。祝賀会等飲食を伴う集会を催す場合は別会計と考えております。他方、収入見込みとしては、住所の分かる卒業生は、現状約二千名弱で、この内半数の方に二千円の年会費を送って頂いたとすれば二百万円近くになる計算です。

復活ロシア会を再び休眠状態にしないよう役員・幹事一同出来るだけ活発に活動する積もりですので、ご支援のほど宜しくお願い致します。

（井上　勝・昭25卒）

会計報告

○東郷先生卒寿記念祝賀会関係（97年11月22日）

1	収入	（単位：円）
	出席者会費	1,280,000
	（1万円／1人、128名）	
	寄付（同窓生ほか）	108,000
	合　計	1,388,000
2	支出	
	準備会費用	14,220
	案内状印刷郵送	342,550
	料理代	566,790
	飲料代	67,294
	記念品代	121,005
	雑費（看板、花、車代ほか）	59,972
	合　計	1,171,831
3	差引次期繰越金	216,169

○平成10年度中間決算（98年4月～9月）

1	収入	
	前期繰越金	216,169
	年会費納入分	2,000
	旧ロシヤ会引継金	661,955
	受取利息	57
	合　計	880,181
2	支出	0
3	ロシア会現有金計	880,181

西ケ原だより

母校の現状

渡辺雅司

「ロシヤ会会報」の前号が出てからすでに十数年が経過してしまったことは、事務局を担当していたわれわれ専任教員の力量不足と怠慢（原会長が書かれているように、学内改革などで超多忙であったことも事実だが）のゆえであり、まず会員諸兄姉に深くお詫び申し上げます。とりわけ長年会長をつとめられた佐藤勇先生の追悼号すら出せなかったことは悔やまれます。

この間にロシア語学科のスタッフも大きく代わり、原卓也、飯田規和、新田實の諸氏が相次いで退官され、志水速雄氏が逝去されてからも、もう十五年も経ってしまいました。これまでの習慣でロシア語学科と書きましたが、実はいまやこの名称すら制度的には存在しておりません。一九九五年にそれまでの語科体制が廃止され、7課程、3大講座制に移行したため、ロシア・東欧課程と改められ、一九九二年に新設されたポーランド語、チェコ語とあわせて一学年一〇〇名という大所帯です。ただし語科制度は廃止されたとはいえ、実質的には語科単位で授業もしていますし、カリキュラムや非常勤講師の手配などは語科でおこなっているので、教師も学生も感覚としては以前とあまり変わってはおりません。ただ以前の事情講義にあたる地域基礎2の講義は、ロシア・東欧課程の全員の教員が1、2年生を対象にオムニバス形式で各自の専門の片鱗を学生に語りかけるもので、ほとんど予備知識なしに入学してくる学生にとっては、同じスラヴでもいかに多様であるかということがわかり良い意味でのカルチャーショックになっています。またそんなことがきっかけとなって、ロシア語を習得したあと、ポーランド語やチェコ語を学ぶ学生もでてきています。

つぎに、現在のロシア・東欧課程の教員を紹介します。

。言語・情報講座

教授　磯谷　孝（課程代表）
ロシア語学、文化記号論
教授　中澤英彦　ロシア語学、ウクライナ語学
助教授　石井哲士朗　ポーランド語学、ロシア語学
講師　金指久美子　チェコ語学、ロシア語学

。総合文化講座

教授　渡辺雅司　ロシア思想史、日露交流史
教授　亀山郁夫　ロシア文学（ロシア・アヴァンギャルド）、ロシア芸術論
教授　A・ドーリン　ロシア文学、日本文学（『古今和歌集』の翻訳で翻訳文化賞を受賞）
助教授　関口時正　ポーランド文学

。地域・国際講座

教授　高橋清治　ロシア・ソ連史、民族問題（特にグルジア）
講師　鈴木義一　ロシア・ソ連経済史
教授　小原雅俊　ポーランド文学、ユダヤ人問題
講師　篠原　琢　中欧（特にチェコ、オーストリア）史
外人教師　ナターリア・シェフテレーヴィチ　ロシア語、日本文学（芭蕉研究）

以上の専任教員のほかに各分野の非常勤講師を数多く招いています。しかしこれを見てわかるように、ポーランド語、チェコ語には外人教師がおらず、ロシア語も70名という学生定員では2名のはずが1名になっており、われわれは毎年スタッフの獲得のために、文部当局と交渉しておりますが、目下のところ予算がついておりません。

なお悲しいお知らせですが、一九九六年から2年間外人教師を勤めたルドルフ・ドゥガーノフ先生（彼はロシア・アヴァンギャルド、とりわけフレーブニコフ研究の世界的権威であり、モスクワの世界文学研究所の研究員）が、今年3月12日に一時帰国先のモスクワで心筋梗塞のため亡くなられました。先生はすぐれた学者であると同時に、学生たちの教育にも熱心に取り組み、いかにもロシア人といったおおらかさで、学生の心を掴んでおりましたので、先生の急逝はわれわれにとっても取り返しのつかない損失でした。つい先日ドゥガーノフ氏を追悼するロシア・アヴァンギャルドの国際シンポジウムがフレーブニコフの生地アストラハンで開催され本学からも亀山郁夫教授が出席し、研究報告をしております。その後9月3日にノヴォデーヴィチ修道院で葬儀が行なわれ、奇しくも氏がその全集の刊行を計画していたフレーブニコフの墓の隣に埋葬されたことは、われわれにとってせめてものなぐさめです。合掌。

いままたロシアの経済危機が報じられておりますが、この数年学生たちのロシア留学がソ連時代には考えられなかったほど増加し、一昨年などは20名以上の学生がモスクワ、サンクトペテルブルグ、イルクーツクなどの大学に長期留学をしたほどでした。また昨年から中断していた国費留学制度も復活、本学からも数名の学生が留学しましたが、この方はロシア側の受け入れ体制が悪く、モスクワ大学を希望したものは全員ルムンバ大学に回され、月額12ドル（！）の奨学金もついに未払いだったとのことで、おおいに問題がのこります。また目下留学中の学生たちは、外貨の交換が停止し、国際送金も困難になっているようですので、在ロシアの同窓諸兄姉にお世話になることがあろうかと思いますが、その折りはどうかよろしくお願いいたします。われわれにとっての救いは、留学した学生がほぼ例外なくロシア贔屓になって帰国していることです。語学力だけでなく、ロシア人の国民性や芸術性に触れ、人間的に大きく成長していることです。飽食の時代に育った学生にしてみれば、ロシアの貧しさ、不便さが逆に貴重な人生体験となり、卒業後も大学院に進学したり（この大学院進学率は外語ではロシア語がダントツです）、ロシア語を生かした仕事についていることは特筆に値します。しかし治安面など不安要因も多いので、毎年留学体験者によるガイダンスを開いて、注意を喚起しております。2年後の二〇〇〇年には本学は府中市の米軍キャンプ（通称関東村）跡地に移転することになっており、目下急ピッチで新キャンパスの建設が進められていることは、「外語会報」などでご存じと思います。よくよく墓地と縁があるのか、こんどは多磨墓地前です。したがって西ヶ原での外語祭もあと2回となりました。この外語祭の盛り上がりは全国の大学でも最上位にランクされておりますので、この開催期間中に開かれるロシア会の総会ならびに懇親会には皆様奮ってご参加下さいますようお願いいたします。

なお、今年の卒業生の氏名と進路は以下の通りです。（昭44年卒・東京外国語大学教授）

一九九八（平成十）年3月卒業生氏名と進路

片平晶子　横浜通商
前川みずき　横河電機
平松潤奈　東大大学院
広山万希子
上妻祐子　パイオニア
松岡恵子　森川商事
本蔵愛里　一橋大大学院
中澤敏志　昭光通商
岡村麻子　東大大学院

恩田一樹　島根県庁
大竹賢治　味の素
佐藤直子　第一勧銀情報システム
高田千瑞子　日ソ貿易
武田裕樹　インドネシア石油
土本晃世　シャープ
渡辺綾子
土屋尚幸
吉見秋子　オーバーシーズエスカーゴ
上利竜太　日本テレビ放送網
江原奈良美
原口由規子　在ロンドン
樋口宣樹　八千代生命
平松丈次　名古屋大大学院
平手寛臣　トヨタ自動車
樋山久美子　イルクーツク大
兵後光香　セイコウエプソン
石渡時懐
伊藤孝文　東京外大研究生
木井康貴　鹿島建設
小林則子　ミネルヴァ学院
久美田弥生　オオクボ
栗山陽子　東京外大大学院
増田彌奈子　さくら銀行
松下智美　ぎょうせい
宮田武彦　クワバラダンスクール
長尾　寛　共同通信
岡島信高　東京外大大学院
小野塚正樹　東京学芸大大学院
大歯秀敏　福岡シティ銀行
大野慶子　ニポロス
太田朱美　名鉄観光サービス
尾崎史子　アイワ
佐藤裕香
柴田健太郎　関西国際空港
四宮千絵　熊本放送
鈴木玄機　日本特殊陶業
高田こるり
竹内昭子　静岡放送
鵜巣喜子　在スエーデン
土屋理絵子　ベストプロジェクト
内田佳詠　住友商事
内廣景太
若松あい　ユアサ商事
半田真由子　農中証券
（以上54名）

97年ロシア語劇『南京虫』

佐伯郁智

去る一九九七年、外語祭期間中の11月23日、大学講堂でロシア科2年生（96年入学、現3年）が語劇公演をおこないました。準備に5ヶ月を費やし演じられたのは、ウラジーミル・マヤコフスキイ作『南京虫』です。

2部9景からなるこの戯曲、第1部は一九二九年のソ連の一地方都市が舞台です。騒がしい市場、不潔でぐうたらな労働者、俗物達の集まった結婚式、そしてそこで起こる火事……。一方、第2部はそれから50年後の「とある社会主義天国」に舞台が移ります。虫一匹いない清潔な街、銀色の「投票機」、巨大な「復活機」といった科学技術、皆同じ青い帽子をかぶり酒もギターも知らない人々……。この1部と2部とのコントラストをはっきりつけることが演出の第一歩でした。第1部は実際に旅行した時目にした現代のロシアの風景、風俗、第2部はザミャーチンの『われら』などからヒントを得、イメージをふくらましました。しかし、いかんせん演劇の〝え〟の字も知らずに演出を買って出た蛮勇の演出家、実際のところは劇としての体裁を整えるので精一杯でしたが。音楽はヴィソツキイの歌を幕前に流したり、ロシア民謡をロック調にアレンジしたものや、それから特にショスタコーヴィチの曲を多く用いました。

舞台美術は、多少の金銭的余裕があったこともあり、しっかりしたものが作れました。そして何よりも特記に値するのはキャスト達の素晴らしい才能と集中力です。人数が足りず、女性が男性を演じたり、一人が、4、5役を兼ねるなど多くの困難にも拘らず、おおいに好演してくれました。結果、上演後概ね好意的な評価をいただくことができました。また、知識と語学力の不足を感じながらも、皆、2年生でこれだけのことが出来たという自信を得て語劇を終えることが出来たようです。

〈キャスト〉
プリプイスキン　川崎珠子
バヤン　小川暁道
ゾーヤ　東条　茜
ロザリヤ　境奈央子
演説する男　堂口剛志
動物園長　五十嵐陽介
教授　平野聖子
ソヴィエト議長　地田徹朗
金丸千枝美、小菅みさと、真篠　剛、南條幸弘、細谷未青、大山加代子、甲野雅、佐伯郁智、太田真由子、平井淳朗、小田上久美子、岩田知子、龍田佳奈、浜崎賢一、野口寛子、川本由紀子

〈スタッフ〉
演出　佐伯、細谷、新田英子、石坂裕美
字幕　南條、大山、皆川裕樹、斎田安広、中野幸男
メイク・衣裳　小菅、山下昌美、菅原直子、川越真由美
舞台美術　平田文子、稲田佐和子
音響　細谷、新田
照明　新田、石坂、山本真理
広報　山本
宣伝美術　中野、福島美由紀、寺田　静
舞台監督・企画代表　橋田智宏

97年語劇「南京虫」の舞台から　左奥は筆者

今回語劇の脚本を選定する際、いくつかの戯曲の中から『南京虫』が選ばれたのは、「タイトルが奇妙で面白そうだから」が第一の理由だったようです。マヤコフスキイに対する先入観もなく、『南京虫』を『10月』の理想をくいものにする社会を糾弾した戯曲」と言うより、むしろ、「訳の分からぬ未来へタイムスリップしてしまった悲劇の男のおとぎ話」と、とらえる同級生が多かったように思えました。練習中、もしかすると我々は教科書でしかソ連を知らない最初の世代なのかな、という偶感が頭をよぎりました。

今年も外語祭期間中、2年生がミハイル・ブルガーコフ作『イワン・ワシーリエヴィチ』を上演します。これで3年連続でソヴィエト期の作品が選ばれたことになります。（一昨年はアレクサンドル・ヴァムビーロフの『六月の別れ』）。ちなみに、近年ロシア語劇は2年生のみでおこなわれ、上級生や1年生が関わることはほとんどありません。

（現3年生）

一九九八（平成十）年度

ロシア会総会のお知らせ

東京外語ロシア会の総会ならびに講演・懇親会を左記の要領で開催いたしますので、どうか、お誘い合わせのうえご参加下さいますようご案内申し上げます。

日　時　十一月二十二日（日）
午後三時から　総会
午後四時から　講演・懇親会

講　演　「二十世紀末のロシアから何が見えてくるか？」
亀山郁夫氏
（母校教授・ロシア芸術論）

懇親会　懇談・学生のロシア民謡などのアトラクション

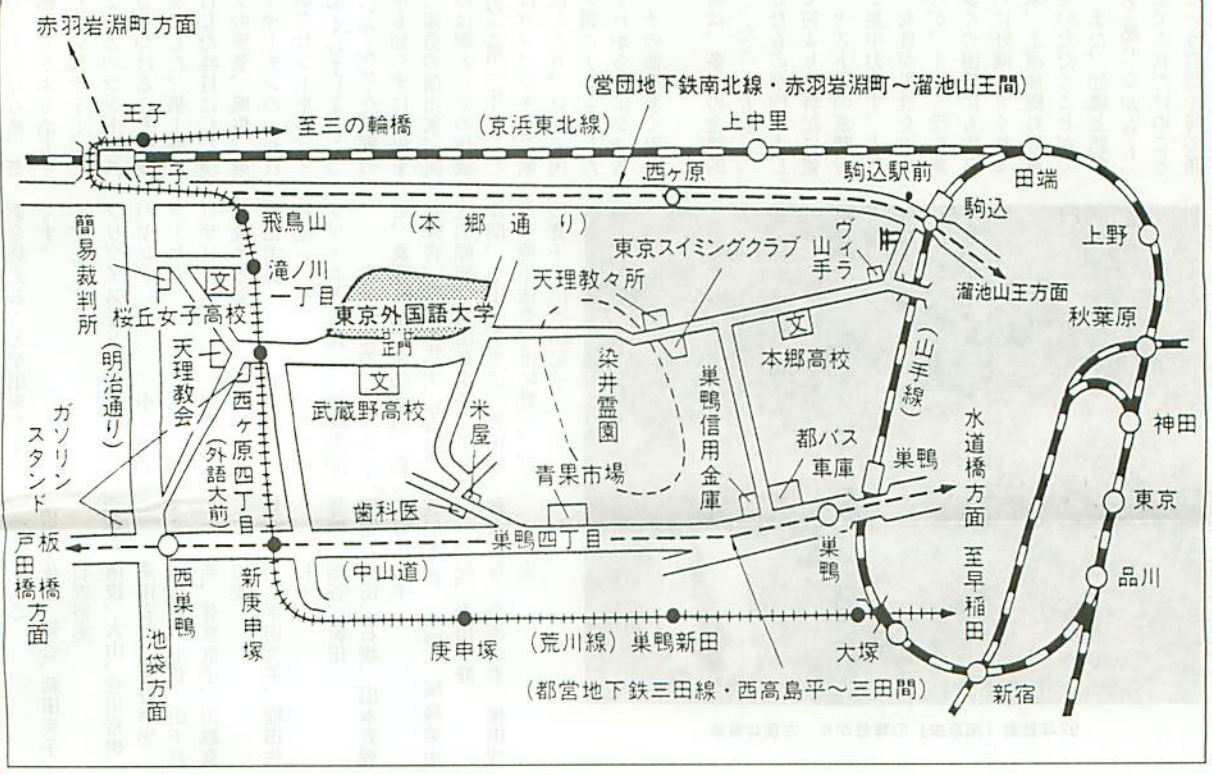
会　場　東京外国語大学四号館
六階大会議室

会　費　五千円（学生は無料）

当日は外語祭の期間中なのでどうぞご覧下さい。母校の総合文化研究所ではこの日午後一時から三時半の予定で、講演会を催します。講師はロシア科同窓の米原万里氏、演題は「浮気のすゝめ」（仮題）。聴講歓迎します。

ロシア語劇はM・ブルゲーコフ作『イワン・ワシリーエヴィッチ』。上演日時は十一月二十三日午後四時～です。

東京外国語大学（総会・懇親会会場）案内図



◆編集後記◆

十一月二十二日に開かれるロシア会のご案内をかねたロシア会会報復刊第1号をお届けします。府中新キャンパスへの移転をひかえ、西ケ原キャンパスに集うのも今年と来年の二度かと思います。多くのご出席があるようにと願っています。

昨年の東郷正延先生の卒寿をお祝いする会には和久利誓一先生はじめ一二〇名をこえる大勢の同窓が出席してにぎやかな集まりになりました。あの時一番言いたかったことだと仰って、東郷先生は先生が心血を注いで完成された露和辞典の編纂の経緯を記した文章をお寄せ下さいました。

ロシア会を再興してはじめて発行する会報なので、再興にいたる経緯や昨秋のロシア会総会で決められた会則、選出された役員の名簿など報告記事が多くなりました。

会報も原先生の仰る「ロシアに関する情報交換の有力な」場を作れるように努力をしたいと思います。つきましては同封のはがきでご近況などのおたよりやご意見をなるべく多くの方からお寄せ頂きたいと願っています。

（町田裕子・昭34卒）